『津田塾大学紀要』第 54 号（2021 年）293-305 頁

〈研究ノート〉

チョーサーの『トロイラスとクリセイダ』研究Ⅴ

星　野　美賀子

まえがき

遅延の説明と津田塾大学における学びの一面

チョーサーの「愛」についての長詩『トロイラスとクリセイダ』研究[3]の第 4 巻目を 1990 年に発表して以来、長い年月がたちました。その間、私は 現実の生活において、多くの事に巻き込まれておりました。中でも、2012 年に突然夫星野英一の急逝に出会い、茫然としておりました。しかし、この動乱の中にあっても、時どき、チョーサーの恋愛についての研究も―いわゆる「宮廷風な愛」を―思いだすこともしばしばありました。また、トロイ戦争を舞台としながらギリシャ時代の、名誉を賭けた武将たちを描くより、愛の諸相を書くことに専心没頭した、チョーサーという中世の大人物について思いを巡らすこともしばしばありました。

しかし、私にとっては、現実の第 2 次世界大戦について書くことのほうが早急に仕上げられるべき仕事と思われたので、まず *Our Voices for Peace from Hiroshima*[4] という広島の原爆問題を起点とする不戦論つまり平和論を書くことを先行させました。しかし、トロイラスという、涙を誘うほど誠実で純情な王子と、眼の中に天国が現れているようだ、と言われることもある、不思議な美女のことは忘れられませんでした。

しかし、その長い空白の合間に、この輪読会の盟友の佐倉リン子様が亡くなられました。この研究会は、彼女の揺るぎなき誠実さともいうべきお人柄に多く負っておりましたが、それだけでなく、彼女の稀な学識からも多くの貴重な賜物を受けておりました。佐倉様は、津田塾大学をご卒業後、ボストン・カレッジ大学院の英文科に 1955 年から 1957 年まで留学なさり、その間、Edward Harsh 教授によるチョーサーの『トロイラスとクリセイダ』の講義に

出られ、彼女が使われた教科書のF.N.Robinson の 注釈版の所々には、その教授の解説が佐倉様によって、書き込まれていました。私達はその書き込みを覗き込み、私達の解釈とほぼ同じ意味のことが書かれているのを知り、我々の中世英語の読み方について力づけられたり、安心も致しました。また、佐倉様は早速、チョーサーの「語り」について『津田塾大学紀要』の第21号（1989）に発表なさいました。

また、真面目で鷹揚なメンバーであられた近藤賚子様もお誘いしました。彼女は、ご自分に割り当てられた分を、たっぷり時間をかけて訳して来られたり、また、小さな野の花を持参してテーブルに飾ってくださるなど、会をロマンチックな雰囲気で満たしてくださいました。更に、近藤賚子様を通して、刈田元司先生ご自身から、刈田元司訳『恋のとりこ』[5]を拝借し、また、宮田武志訳『トゥロイラスとクリセイデ』[6]を紹介されました。

このようにして出来た研究誌は、誰がどの部分を訳したかを区別できない程、調和を保っていたので、三人とも、一人の訳者によるもののように、統一のとれた、解説つき訳文を『紀要』に提出したいと願いました。そのため、各人が説明を付けながら訳した部分に訳者の名前を開示するのを控えました。執筆者について現在、明らかなことは、次のとおりです。

1　はじめに　星野

2　物語

　第一巻　星野　近藤　佐倉

　第二巻　星野　近藤　星野　近藤

　第三巻　星野　近藤

　第四巻　星野　近藤　佐倉　星野

　第五巻　星野

このように和気あいあいの中で進んでいましたが、近藤様もご都合がつかなくなり、残念ながらこの研究は第IV巻で終わっておりました。

参考書などは、星野が、好奇心の赴くままに読んだものであります。C.S.ルイスの *The Allegory of Love*[7] には惹かれ、影響を受け、この『トロイラスとクリセイダ』を書くきっかけを作ってくれました。また、中世英語を読むにいたったのは、星野の在学中に中島文雄先生が東大大学院での講義に『カンタベリー物語』を選ばれたことがあげられます。本論稿は津田塾にあっては、ごく稀にしか取り上げられない中世英語を元にした、複数の人員による講読を、「宮廷風恋愛」の概念を視野に入れつつ書き記したものです。

津田塾大学では、近藤いね子先生が小説を専門になさったためか、講師室

いっぱいに小説研究の雰囲気が漂っていたように感じました。若い卒業生が小説風の生活記録を書くなど、また、教師も圧倒的に小説を論じる者が多かったと思いました。チョーサーの研究は、学科としては「中世英語」の範疇に入ると思いますが、しかし、チョーサー自身、いわゆる「小説」などまだ生まれていなかった時代に、心理描写の細やかなこと、物語の特質を備えていることなどから、小説史の第一番目の位置にあげられる文学者だと思います。勿論、そのイメジャリーの美しさから詩人である特徴も、この作品のあちこちに散見されます。

しかし、主人公のトロイラスがクリセイダへの愛のために壮烈な最期を遂げる筋書に対面するには、それだけの力が要るだろうと思うと、なかなか第五巻に取り掛かれませんでしたが、私にも「時」が与えられ、この度、このロマンスの最終巻を、読み辿り、簡単ながら、この悲劇的なロマンスの最後を締めておきたいと思いました。大変遅れたこと、お詫び申しあげます。前書きが長くなりましたが、津田塾大学における学びの一面を敢て書かせて頂きました。

チョーサーの『トロイラスとクリセイダ』研究Ⅴ

二　物語　（續き）

このチョーサーの物語は、言うまでもなく、歴史的に名高いトロイ戦争を背景にして描かれている。全編に、その緊張が張り詰めており、一般の市民生活も戦争の影響を被り、武将の生死の話も後を絶たない。

ある日、クリセイダは寺院のなかにいたところをトロイラスに深く認められ、彼の心を捕えることになる。トロイラスは、胸を震わせて彼女の虜になる。そこをパンダラスが両者の間を取り持って、二人は、宮廷風な愛の特質である誠実さの中で優雅な恋愛生活を送り、3年間ほど、夢のように満ち足りた日々を送る。その後、二人の甘美な生活を揺るがす事件が襲うことになる。

この恋愛詩の第5巻の始まりは、クリセイダがトロイの町を離れ、ギリシャの都に連れて行かれることから始まる。理由は、その時までギリシャ軍に捉えられていた捕虜のトロイ人のアンテノールを解放するから、その身代わりにクリセイダをギリシャに寄こすように、というギリシャ側の命令に従うためであった。

クリセイダは、この上なく悲しみ、トロイラスも、言いしれぬ絶望におそわれたが、それを表面にはださず、鷹を一羽、手先にとまらせて、彼女を馬

で送った。この鷹は、トロイラスが、自分の心が別離で恐れおののいているのを隠すためのよい手立てとなったであろう。二人は結婚によって、世間に様々なことを公開するのを避け、誠実で純粋な愛に殉じ、いわゆる courtly love、宮廷風恋愛に従うことを選んでいた。

ついでながら、トロイラスが、ついにクリセイダに裏切られたことを知った時の彼の猛烈な悲嘆、懊悩は、世間に愛情についての諸事情を知られる結婚など思いもかけなかったことを意味する。クリセイダは別れるときに10日後には、トロイに帰ると約束してギリシャに行くが、クリセイダが、約束した別離の10日間が過ぎてもトロイに現れず、その時ついに裏切られたことに彼は気づく。しかし、その後もなお、彼の愛情行為は宮廷風恋愛に殉じるものでなければならない、と思い、結婚は避けていた。

さて、トロイでクリセイダと別れた最初の日のトロイラスの懊悩は、心理上の細かい抽象的な説明ばかりではなく、突然に、「白い胸」という具体的、官能的なイメージの表現になっても現れる。

私の愛する、いとしい人はどこにいるのだろう？
あの人の、白い胸はどこにあるのだろう？　どこに？
彼女の腕はどこにあるのだろう　そして彼女のあの澄み渡った瞳は？
昨夜の今頃は、私のそばにあったのに。
今は、ただ一人で　涙でいっぱいになり　泣きつづけなければならない
そして探し、掴んでみなければならない、だがここには
枕が一つあるきりで、抱きしめるものは何もない。(32)[8]

続いて、

どうしよう？　あの人は、何時帰ってくるのだろう
ああ、どうしてあの人を行かせたのだろう？(33)

ここには、読者の気をそらす突然性がある。それは、わが国の夏目漱石による熱烈で、悲劇的な恋愛小説『こころ』[9]の中の「先生の遺書」に書かれている激しい慕情の告白の中には見いだされないようなものである。そして、ある突然性によって、また、官能的な美によって聞き手あるいは読者にある刺激を与え、新しい感覚でもって長い恋愛の物語に引き込ませる結果を作っていると私には思われる。これは、チョーサーの『トロイラスとクリセイダ』の

全篇の所々に見られる特徴であり、漱石による恋の告白には見られない特徴だと思われる。そして、その唐突な変化ゆえに、この長い詩も中世には、読者あるいは聞き手を楽しませたであろう。また、このようなチョーサ―のテクニークによって、激しい劇的なトロイラスの慕情の長い語りにも飽きることなく、耐えられたと思われる。余談になるが、先年、夏目漱石の『こころ』の、近藤いね子による英訳[10]を再読中に「先生の遺書」が細部にわたって、こまやかに、リアリスティックに書いてあるせいか、一気に読むのが難しいのを感じた事を思い出す。チョーサーの作は、トロイラスの深く、誠実な愛が細密に書きつづってあるが、稀には官能的な描写も交え、また、全篇に、濃密にパンダラスの軽口や冗談も交えてあるので、変化に富み、広大な「世間」や「人間界」を感じさせる。

こうして、トロイラスはクリセイダが約束した十日後の再会を夢や妄想にさいなまされながら、そしてその苦痛をパンダラスに当たり散らしながら時をすごしていく。パンダラスは「この十日間の憂鬱を忘れるか、押さえつけるかして、その憂鬱から来る苦痛をほとんど感じなくなるようにしようではありませんか」(57) と言い、ちょうど、その頃戦闘が休戦状態に入っていた安楽さの中で、サーペドン王の所の愉快な連中が楽しむところへトロイラスを連れていく。その王は世界中で一番美味しい食べ物を、費用にかかわらず、トロイラスやパンダラスに供し、美しい婦人の一群も連れてきて、大饗宴を催し、トロイラスを慰めようとした。楽器もそろい、その妙なる調べは彼の心にも入っていくようであった。だが、彼の心は、クリセイダの美しさから離れなかった。こうして第4日目を迎えるとトロイラスは帰りたいと言い出すのであった。パンダラスは必死になって引き止め、一週間が終わるまでその館ですごした。(72) トロイラスはクリセイダが家に帰っているように、と神に祈るが、パンダラスのほうは、この時期になるとさすがにクリセイダが、ギリシャに住む父親のカルカスの家からトロイには帰らないだろう、と確信しはじめる。しかし、トロイラスには、そのようには告げないで、二人はクリセイダの家に行ってみる。

彼は言った、なんと寂しい屋敷だろう
ああ、昔は　こんなに素晴らしい家はないと言われたのに
今は、捨てられて　人気のない邸なのだ！
ああ、明かりの消えてしまった門灯よ、
・・・

お前は、崩れおちてしまい、私は死んでしまうだろう
案内してくれるあの人がもう居なくなったから。(78)

このように彼はトロイの街を廻り歩くが、彼の嘆き悲しみは測りがたく大きく、「顔色は死人のよう」であった。

そして、彼は、昔の楽しかった思い出に耽るが、その描写は、漱石の『こころ』には見いだせない華麗な雰囲気をこの悲恋のなかに持ち込んでいる。

あそこで、 あの人が踊るのを見たのだ
まさにあの社のなかで、きれいな目をしたあの人が
私の愛するあの人が、私を始めてひきつけたのだ。
あの向こうの家のあの場所で、私のいとしい、愛するあの人が、
とても女らしい歌いぶりで、心に響くような節を、素晴らしく
上手に歌い、そして、澄んだ声だったと今も覚えている。
あの人も、あの場所で、はじめて私に恋心を抱いたのだ。(83)

その後、トロイラスは城門のほうに馬を飛ばし、独り言を言った。「ああ、ここから私の幸福も慰めも出て行ったのだ！今は恵み深い神に、憐みを垂れ、あの人がトロイに再び帰ってくるのが見られますようにと祈るばかりだった。」(87) その後、自分の悲しみを詩に表し、星に呼び掛けて「だから、10日目の夜に、一時間でも、あなたの輝かしい光が得られないなら、私も船もチャブリデイス（地獄界）に呑み込まれてしまうだろう」(92) と自分の心境を綴った。また、月に向かっては、自分の悲しみを打ち明け、風に向かっては自分の悲しみを明かした。

このようにして、彼は、パンダラスの厚い友情に支えられながら、10日目を迎えた。

他方、クリセイダはギリシャ軍に囲まれて、「生まれてきた不幸せ、悲しさ」を嘆きながら生きている。危険を冒して夜、外に逃げても、卑劣な男性につかまり、毒牙にでもかかれば、いくら純潔でも台無しになるとおそれている、そしてトロイラスと過ごした歓楽にみちた日々を思い出し、なぜ、アンテノールの身代わりにギリシャに連れて来られる前にトロイラスから勧められたように、一緒に逃げなかったのであろう、と悔やみ始める。そして、「どんなことがあっても明日の晩には、ギリシャの軍隊」をぬけだして、トロイラスの好きなところへついていこうと決心するが、2か月もたたないうちに、こ

の決心を翻してしまう。

一方彼女をトロイから引き取るときに、ギリシャ軍の騎手をつとめたダイオミディーズは、彼女を見た途端から彼女に恋心を抱くが、ある日クリセイダに言い寄る。「ギリシャ軍のなかに入ってからあなたの顔は憂いにみちている、そのお顔から塩からい涙を取り去り、美しさを取り戻してください」(125), (131) と。クリセイダは、トロイラスの数々の優しい行為を思いだしながら、トロイの街に郷愁を感じていたが、まる2か月たたないうちに、ギリシャに留まろうという気になった。ダイオミディーズは、自分が恋するようになったクリセイダという女性は既に、ほかの男性と恋仲であることに気がつくが、そこは、彼も、ギリシャの大将軍のこととて、すぐに身をひくようなことはしなかった。彼は、機敏、大胆、強壮であり、力強い声と、壮健な手足をもっていたと伝えられる。作者チョーサーによるクリセイダの容貌の描写においても、変化が現れる。先にトロイラスとの出会いにおいては、クリセイダは、一点非のうちどころのない美貌の持ち主のように描かれていたが、トロイラスから離れて後の描写においては, 美貌の持主だが「眉がくっつきそうになっている」という点が上げられている。(117) だが、眼についていうなら、相変わらず澄み渡っていて、眼のなかに楽園があるようであったという人もあった、とチョーサーは言う。(117)

一方、トロイラスについては、彼は、充分に上背があって、造形主もこれ以上どうしようもないほど均整がとれた人物であり、勇敢で、しかも、誠実な人物であったと、作者は非の打ちどころのない男性像を語っている。

トロイラスがその激しい慕情の虜になっている間、クリセイダのほうは、ギリシャ側の、父親である預言者、カルカスの天幕にいたが、ダイオミディーズの甘言に惹かれはじめていた。彼女は「私、トロイの町が好きですわ」と言っていたが、次第に、古い立派な家柄も持つダイオミディーズに惹かれはじめ、遂に、このギリシャの主将、ダイオミディーズに誠実さをつくす気になる。そして、トロイラスがクリセイダに贈っていたブローチをダオミディーズに与えたり、さらに、自分の小袖を彼に与え、小旗として使うようにさせたりするなど、ダイオミディーズに心を許した。後に、このブローチは、象徴的な役割を果たすことになる。なぜなら、後日、トロイラスは、このブローチが、彼の恋敵のダイオミディーズの陣羽織の襟についているのを見て、クリセイダが敵の大将のダイオミディーズにすでにはっきりと靡いているのを確信することができたからである。しかし、作者チョーサーは、愛人を裏切るのに、クリセイダのように嘆き、懊悩した女性はいない、と彼女をやさしく

弁護もしている。

一方、トロイラスの方は、10日目の朝、「雲雀が爽やかな心で歌う頃」(159)、トロイの城壁の上からパンダラスと一緒に町を見守っていた。そして、来る人ごとに、彼女ではないかと間違うのであった。

「たしかに見えるよ、あの人の姿が！そら、向こうにさ。君、眼を上げ給え、見えないのかい？」これに答えてパンダラスは言った。「とんでもない！・・・向こうに見えるのは、なんのことはない。動いている荷車ですよ。」(166)

このトロイラスの間違いを正すパンダラスの答によって、チョーサーの読者は、一瞬悲劇的なムードから、喜劇的なムードを味合わせられる。これも、この物語が非劇的な恋愛を描きながら、喜劇的な要素も読者に味合わせたかもしれないと筆者は思うのである。

その翌日、二人は、城門のところに行き、城壁にのぼるが、トロイラスの心は、打ち沈んで帰宅し、数日の間、思い悩む。「ただちに死にたいという覚悟をきめるより外には、取るべき道」(173)を見出すことができなかった。

ある日、彼は次のような夢をみる。それは、大きな牙を持った猪が、明るい森のなかで眠っており、見ると、その腕に抱かれた美しい愛人のクリセイダがしきりに接吻しているものであった。(178)トロイラスは、その夢から覚めた後、自分が裏切られたことを感じとり、気も狂わんばかりに悲しみ、怒る。そしてクリセイダを宗教的にまで持ち上げて、崇め、愛していたことを知らせる、

ああ、信頼よ、ああ、誠実よ、　ああ、深い確信よ、誰が
私から、彼女を奪いさったのだろう、私の喜びのすべてである
クリセイダを？(180)

・・・私はあなたの語る言葉の一つ一つを、福音だと思っていたのだ！(181)

そしてパンダラスに苦しみを打ち明け、あの夢の本当の意味を知るには、手紙を書くのがよかろうということになり、トロイラスはそれを実行する。

鮮やかな花のようなあなた、これまであなた以外のかたに
献身したこともなく、これからも、そうしようもない私は、
心、からだ、命、喜び、思い、そしてすべてを捧げて、あなたに
尽くすでしょう。(189)

Right freshé flower, whose I have been and shall,
Withouten part of elleswhere servyse,
With herte, body, lyf, lust, thought, and all:（189）

と書き、次のように続ける、

どうぞ理解してください、愛しい人よ、ご存じのように
ずっと以前にあなたが去られたときに私は、
胸を締め付けられるように悲しく感じました。
その悲しみから救われるのは、何と遠いことでしょう。
私は、日に日に幸せを失っていきました。
そして、それは、あなたがそれでよいと思し召す限り続くのです。（190）

このように、トロイラスは呼びかけるが、その手紙は真実そのもので読者の心を揺るがす。彼はクリセイダに、どんな気持ちで暮らして居るかを知らせて欲しい、と頼む。

そして、これまで犯した私の罪が死に値するとして、
あるいは、この上私に会いたくないと思うならば、
私がこれまであなたに、献身してきたことに対する褒章として
お願いだから、手紙を書いてください。
私の心よりの貴いお方よ、
神への愛のために、そして導きの星として。
そうすれば、死が、私の苦悩のすべてを終わらせて
くれるだろう。（199）

それに対するクリセイダの返事は、表面上、トロイラスの愛をことわらないが、それを読んだトロイラスは、それを信じる気にならず本当のことを知りたいと思う。

しかし、作者であるチョーサーは、如何にも人間社会に通じている人らしく、トロイラスの懊悩にも、また彼が愛するクリセイダの欺きにも、悲しみを覚えて絶望の極みに晒される時でさえ、世間というのは、このようなものだと、いわば理想主義では通らないことを「世の中とは、こういうものなのだ」とはっきりと認め、かつ、救いを祈っている。「神よ、われらを禍から救っ

てください、すべての真心ある者を栄えさせてください！」と。(205)

しかし、トロイラスは、食事もとらず、睡眠も絶たれ、物も言わないで、死んだような暮らしをして過ごした。正気も失わんばかりで、とくに森のなかで美女を抱いている猪のことを不吉に思い浮かべていたが、ついに、女魔術師と呼ばれる妹のカッサンドラを呼びにやり、彼女の意見を聞くことになった。カッサンドラが、遂に、その猪はダイオミディーズだと解き、「ダイオミディーズさんの勝ちで、兄さまの負けよ」といったときには、「嘘だよ」と怒り、突然ベッドから立ち上がり、ことの真相を確かめようとした。

そして、それまでの軟弱な生き方から雄々しい生き方に変わった。

さて、その頃、トロイという繊細で気位の高い優美さを持つ国家は、引き続く戦争のために、衰えかけていた。「･･･ある国民を他国民へと交代させる、あるいは低めるという運命を握っていた女神のジョヴは、トロイの国からその輝かしい羽毛をむしり取り、ついに人々は喜びを失っていった。」(221) そして、運命の女神が、トロイラスの魂を肉体から引き離そうと決意したのであった。ギリシャ側の名将のアキリーズによって、トロイラスの兄のヘクターが殺害され、その遺骸は、地上を引きずりまわされた。(223)

兄を慕うトロイラスが、この戦争の過酷さの影響を受けないはずはなく、赴く戦場で数数の手柄を立てたが、つねにクリセイダのことを思い、手紙を書いたり、彼女のためなら、死んでもよいと思うのであった。

しかし、彼女の誠実さを疑っているときに、偶然、ある証拠となるものを発見して、クリセイダが、すでに誠実さを他の愛人に移していることを見定めてより、落胆も激しく、絶望的になる。その印というのは、かって自分が彼女に与えた、記念のブローチが、デイフィーバスがギリシャ側のダイオミディーズから奪い取った陣羽織の内側の襟のところにつけられていたからである。恐れ驚いたトロイラスは、そのブローチは確かに自分が彼女に贈ったものであることを確かめ、また、その陣羽織は確かにダイオミディーズのものであることも確かめた。

そこで、彼は、パンダラスを呼び、事の重大さを話したが、心は収まらず、安らぎを求めるには死ぬしかないと思う。

そして、次のように言った、

ああ、愛するクリセイダよ、
あなたの誠実はどこに行ったのだ、あなたの名誉はどこに行ったのだ、
あなたの愛はどこにあるのだ、あなたの誓いはどこにあるのだ

あなたは今、ダイオミディーズのことでいっぱいなのだ
ああ、あなたが私に誓った事を守れないにしても、
まさか、こんなに手ひどく私を欺かなくてもよかったろうに！（240）
誰が二度と、誓いの言葉などを信じるだろうか！（241）

と彼は言った。無二の親友であるパンダラスもトロイラスに同情し、ついに、「全能の神がこの世界から今すぐにも、クリセイダを除き給わんことを！これ以上、私は何も言えません。」（249）と言った。

第二王子であるトロイラスの兄にあたるヘクターが戦死して、過酷な扱いを受けたのは文学史上に残っているが、トロイラスも今は臆す原因もなく、勇んで戦場に出て、多くの戦功を立てた。ギリシャ側のダイオミディーズと凄惨な一騎打ちを繰り返したが、いずれの戦闘においても、どちらが勝者になるということはなかった。

ついにこの王子トロイラスは、戦闘において引けを取ったことのないアキリーズによって打ち倒されて、戦死した。

作者チョーサーは、最後に、周囲の女性たちに向けて、「男性の裏切りに注意しなさい」という警告を発している。一方、トロイラスの魂は天に上り、下界を見下ろしている。

最後にチョーサーは次のように祈る：

見える敵、見えない敵より、私たちをお守りください。
そして、イエスよ、私たちの一人ひとりを、
あなたの慈悲を受けるにふさわしい者にしてください、
あなたの慈悲にかけて、処女であり、あなたの優しい母君の愛に
かけて　　アーメン（267）

注

テキストとして読み、参考にしたのは 1, 2 である。

1　*The Works of Geoffrey Chaucer*, ed. F. N. Robinson, Oxford Univ. Press, 1977.

2　*Troilus and Criseyde*, Ed. by John Warrington, Revised by Maldwyn Mills, Department of English, Univ. College of Wales, Aberystwyth, Dent and Dutton, 1974.

3　『チョーサーのトロイラスとクリセイダ』研究（I, II, III, IV）
『津田塾大学紀要』第 14 号（1982），15 号（1983），16 号（1984），22 号（1990），星野美賀子，佐倉リン子，近藤賚子.

4 Mikako and Eiichi Hoshino, *Our Voices for Peace from Hiroshima*, PT. II, 3, C, The Ancient Tale of War-*The Iliad*, D, The Wrath and Retaliatory Mentality of Achilles, pp194-203. Tokyo, Shinzansha Pub. com., 2020.

5 『恋のとりこ』*Troilus and Criseyde*, G. チョーサー，刈田元司訳，伸光社，1983.

6 『トゥローイラスとクリセイデ』宮田武志訳，大手前女子学園アングロノルマン研究所，1979.

7 C. S. Lewis, *The Alegory of Love*（1958），Oxford Univ. Press, 1967,（邦訳『愛とアレゴリー』玉泉八洲男訳，筑摩書房，1972.

8 本論稿における（　）内の数字は、Warrington ほか編（中世英語）の *Troilus and Criseyde* のスタンザにつけられた数字を表す。

9 夏目漱石『こころ』1914，新潮文庫，2017.

10 Soseki Natsume *KOKORO* Translated by Ineko Kondo, Hokuseido, 1941, 国書刊行会，2018.

参考文献

11 桝井迪夫『チョーサー研究』研究社，1977.

12 Chretien de Troys, *Arthurian Romances*, trans. W. W. Comfort, Everyman's Lib, 1975.

13 青山吉信「アーサー王伝説」,『中世ヨーロッパ』木村尚三郎編，有斐閣新書，1980.

14 E. R. クルツィウス「バラ物語」,『ヨーロッパ文学とラテン中世』南大路振一，岸本通夫，中村善也訳，みすず書房，1978.

15 岸谷敏子「宮廷風恋愛とラインマルの高きミンネ ―ミンネザング研究序説―」東京大学教養学部編,『外国語科研究室紀要』第 27 巻 1 号，1979.

16 ドニ・ド・ルージュモン『愛につい』鈴木健郎，川村克己訳，岩波書店，1959.

17 柴田良孝「主人公で読む G. チョーサー『トロイルスとクリセイデ』」『東北学院大学紀要』，2018.

補充ノート

一本の眉について

チョーサーはクリセイダの容貌について次のように述べている。

And, save her browès joinden y-fere,

There nas no lack, in aught I can espyen;（117）

「彼女の両方の眉が繋がれている事を除いては、私が見るかぎり欠点は何も見つからなかった」と。

私は、この眉のことを不審に思い、津田塾大学の同窓生が創る「ふれあい英文読書会」（山下順子事務長，田村真知子ズーム長，小林和子，小脇奈賀子，松沢妙子，赤井泰子，福田陽子，松村ひろみ，戸田知子）の例会の後で、その穏やかな雰囲気に感謝しながら、「眉」のことを話題に出した。その夕刻、永沼洋子様から「YouTube Best and Worst Makeup Moments in History」という、いわば世界の化粧法を歴史的に見る、とでも言える動画を贈られた。

高邁なチョーサー文学を俗化、あるいはサブ・カルチャー化する恐れを感じながらも、そのURLから学んだことを整理しておきたい。

1．古代ギリシャにおいては、両方の眉を一つに繋ぐことは、(恐らく有閑富裕層に見られる) 一つの風習であり、クリセイダ個人に見られる特殊なものではなかった。

2．なぜそうするか、その化粧法の意義は、と問うとそのメイクアップをほどこすと、その女性はやゝ知的に、また威厳を具えたように見える、あるいはやゝ野性的に見えることなどがあげられると思う。

この眉についての作者チョーサーによる言及は、以後繰り返されることはなく、クリセイダは完璧な美貌の主として表されている。なお、彼女の美の最高の魅力は「眼」にあったと著者は言う。そしてその眼の中には天国が建っていたようだった、That Paradise stood formèd in her eyen と最高の賛辞が書かれているのは、「両側の眉が繋がり合っている」欠点が述べられた直後の事である。

URL: https://www.youtube.com/watch?v=i8e5D83P6UI

なお、このURLをお贈りくださった永沼洋子様の英知と電子技術に深く感謝いたし、ここに厚く御礼申しあげます。